かぐらおか

（題字は前学長　山田守英氏）

第　32　号
昭和57年5月1日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

（写真撮影　学生課 渡辺　公稔）

早春の十勝岳

内　　容

新入生を迎える……学長　黒田　一秀…2
私と初期研修……建部　高明…3
海外だより……高村　孝夫…4
昭和57年度入学式……5
昭和57年度運営組織……5
研究室紹介……高橋　正孝…6
新入生研修……6
昭和57年度の主な年間行事……6
課外活動短信……6
学内規程……7
第4回卒業式……8
窓　　外……8

新入生を迎える

学長　黒田一秀

Most true is it, as a wise man teaches us, that "Doubt of any sort cannot be removed except by Action."

— Thomas Carlyle

4月9日の入学式から1ケ月経った。この間に講義が始まり、新入生研修、上級生との接触、さらに5月の連休などがあって、新入生諸君にはどうやら学生生活の見当がついてきたのでないかと想像する。

ここに入学式に際して述べたところの大要を再録して、改めて新入生歓迎の意を表したい。

第10回の新入生として120名の諸君を迎えたことは、われわれ教職員にとってまことに喜びにたえないところである。これから6年間にわたって履習課程が展開されているが、6年間は決っして短い期間ではない。本日の初心を卒業を迎える日まで保ち、履習目的を達成されるよう心から願っている。

学習目標は課程修了の時点で、先輩達に加わり初心者として、直ちに医の実践活動に入ることが出来るよう自らを養うことである。諸君をまっている医の実践活動は広く深く、一生をかけて学び続けるに値する、すばらしい世界である。

大学は諸君と、一人前の人格として対応したいと考えている。新入生諸君は成人式前の人が多いのではあるが、医学生として自己形成に励むのであるから、年令に拘らず、自分で判断し、自分で自分の学び方を創って行かねばならないのである。

医学校の履習形式が単位制でなく時間制を主にしており、専門課目では全科必修であること、本学では単科医科大学の特徴を活かして、一般教育と専門教育とを有機的に結ぶ6年間を一貫した医学教育を行う様配慮されている点などの特色については、すでに承知されたことであろう。

さらに大切な特色は病院における臨床実習のあることである。実習病院として大学附属病院と市中の関連教育病院とが用意されているが、何れにしても、病院は患者さんが不安と恐怖とをもって相談にこられるところであり、決して学生諸君のためにあるのではない。学生諸君は許されて病院に於ける診療の実際に立会い、医師をはじめとする診療チームと、医療を求める患者さんとが、どんな関係にあるかを観察し、許された範囲内で業務に参加し、医師となった時に直ちに責任ある行動をとれるように修業するのである。工事現場や農場での実習とは根本的にことなるものである。そこでは医学の理論だけでは対応できない病める現実の人が助けを求めている。すべての病者に対して、自分の肉身に対すると同じ様に和らいだやさしい心をもって接する場所であることを是非心得ていてほしいのである。

医学の父ヒポクラテスの言葉に「生命は短く、術は永遠である。正しい機会は刻々に移り、試には惑い多く、判断はむずかしい。およそ医師は単に必要なる学習だけで事足りるものではない。その目的達成には病人そのものと、その環境と並びに外界とに考慮を払うことが必要である」というのがある。これはその後二千数百年経って著しく医学の内容が豊富になって現在でも真実である。

医学が人の生命活動に関する抱括的な学問であり、医を職業とする人は単に個々の専門に閉じこもることなく人間を全体から見ること、人間を愛することの大切さを銘記してほしいと思う。

師・同輩・先輩・後輩の交りを深め、各種の課外活動等にも参加し、すべてに好奇心を働かせ、心と体とを積極的に動かしてみてほしい。そこから必ず未来が自ら啓けてくるのである。

諸君は大学で学ぶことを自己の力によって獲得した特権と思わず、社会が諸君の働を必要としているからであると理解すべきだと思う。そこにvocation, professionとかBerufとか知的専門職とかの真意があると思う。大学で学ぶ人は自由人であると同時に社会から托された使命を荷う人でもある。

これからの在学期間、医の本質を求めて、よく学び、よく遊び、元気に大学生活を送られるように願ってお一人お一人のスタートを心からお祝する。

私と初期研修

建　部　高　明

昭和33年5月の或る日、その日の朝刊で国家試験合格を確認し、私は宮城県の小さな町の病院へ赴任した。今でいう初期研修であり、以後数年間この病院で研修生活を送った。この時期に体験した疾患のいくつかが今でも明瞭に思い出されるのである。

昭和33年といえばわが国で日本脳炎が猛威をふるった年であり、小さな町立病院といえども伝染病棟があったため、10名をこえる脳炎患者が次々と収容された。高熱と意識障害、そして間歇的に襲ってくる痙攣発作と呼吸停止のために、私を含めて3名の内科医は病室から病室へと駆けまわったが、結局生存したのは約半数であり、不思議なことには生存例のほとんどが老人と小児であった。

初めて往診を依頼されて診た患者は、高熱と筋肉痛のため臥せっていた農家の青年だった。眼球結膜は高度に充血しており、腓腹筋の著しい握痛がみられたので、ワイル病と診断した。この町の水田は稲刈りの時期になっても足がとられるほどの湿田のためか、年々数人のワイル病患者が入院した。黄疸期にしばしばみられる幻視（天井に虫が這っているとの訴えが多かった）が印象的であり、また各種臓器が障害され、病状も多彩だけに医者の匙加減がものをいう疾患だった。

小児科医が不在なために小児患者を診療する機会も多く、しばしば難儀した。4～5才の女児が原因不明の高熱で入院した。著しい白血球増多症から感染病巣の存在は確からしいが、その部位を確認できずにいたところ、頭部に腫瘤が出現し、そこから自然に排膿して下熱した。頭蓋骨の骨髄炎という診断だった。以来、高熱のある小児をみたら骨髄炎も考えることにした。

かっては町の健康優良児として表彰されたことのある3～4才の男児が、腹痛と嘔吐のために通院していた。糞便中に回虫卵をみたので駆虫をしたところ回虫の排出をみたが、腹痛と嘔吐は一向に改善されずに入院した。入院後微熱がみられ、やがて頭痛も訴えるようになり、軽度の項部硬直もみられた。髄液の性状から結核性髄膜炎と診断された。その後昏睡状態が1カ月以上持続したが、懸命の治療によって快復した。〝小児は生命力が旺盛だから決してあきらめずに手を尽くすように〟との先輩の言葉は忘れられない。

そのほか数々の体験が苦労せずに思い出される。また、病歴の取り方、身体所見のとらえ方、患者との対応の仕方など、先輩から叩き込まれたことは、今もって身についている。この病院で4年間を過したが、あとでふり返ってみると、3年以後に体得したことには目立った進歩はなく、この期間にはむしろ体得した診療内容が果して最善だったかを静かに反省すべきだったと思われた。このような反省の場としては、反省に必要な情報のたやすく得られるところ、すなわち大学が最適である。いわゆる初期研修の期間としては2年位が妥当であると考えている。

その後、私は大学の医局へ帰り、以来10数年にわたり診療に従事したが、この期間の診療体験はたやすく思い浮ばないのは何故だろうか。新たな体験に対する感受性が次第に低下したためだろうか。その理由はさておいて、卒後短期間の診療体験が、意識はされないが、現在までの私の診療生活の根底に潜在していたことは確かである。

さて、本学では今春4期生が社会へ巣立ち、また院内あるいは院外での卒後研修はすでに開始されている。卒後研修、とくに初期研修についての見解は、診療科によって一様でないと思われるが、内科医としては卒後なるべく早い時期に第一線の医療を幅広く体験することをすすめたい。primary medical care の習得はもとより、内科一般について研修することが、内科診療の原点であると思うからである。また、卒後数年間の診療経験がその後の診療生活に大きな影響をもたらすことを考えると、有能な指導医のもとで、しかも意欲的に行動し、充実した研修生活を全うして欲しいと念願するものである。本学出身者がすばらしい指導医として後輩の面倒をみる日の近いことを確信している。

（内科学第二講座　助教授）

＊ 海外だより ＊

霧の町サンフランシスコから

高 村 孝 夫

霧の町サンフランシスコに来て最早9カ月を迎えました。昨年7月31日に成田国際空港を飛びたった時の期待と不安が入り混った複雑な気持を今改めて憶い出している所です。

サンフランシスコについて最初の仕事は入国手続をすることで係官の「グッドラック」という言葉を聞いた時にはさすがにほっとしたのを憶えています。出迎えのM氏の車でサンフランシスコに向う途中のフリーウェイの広さをみて「とうとうアメリカに来てしまった。今後10カ月は日本に帰ることが出来ない」ということを自分に言い聞かせたことを昨日の事の様に思い出します。しかし道路わきに見えるこの茶色味をおびた景色はどうしたことだろう。この国は真夏にも拘らず木の葉が緑色にならないのだろうか？写真で見たあの美しいカリフォルニアはどこにいったのだろう？というのが最初のいつわらざる印象でした。私を少なからず落胆させた原因は、この時期が殆んど雨が降らず、このため木々が一見枯れかかっている様な感じを受けたことが後に分りました。しかしその後は冬になっても草木の緑が枯れることなく成育しており、冬国に育った私には新たな驚きでした。特に私の留学先のカルフォルニア大学サンフランシスコ校は日比野公園の25倍の広さを有するゴールデンゲート公園のすぐそばに位置しているというきわめて恵まれた環境にあり、16階の研究室の窓からは爵蒼と繁った森と広い芝生、美しい池を有するこの公園だけでなく、はるか遠くにはこの町の象徴とも言うべき金門橋、また頭をめぐらすと高層ビルが見事に竝んだダウンタウンを通して対岸のオークランド市そしてその間を結ぶベイブリッジをまさしく絵葉書の絵の様に見渡すことが出来、なる程この町は本当に美しい、多くのアメリカ人がいつかはこの町に住むことを希望する気持ちがうなづける気がします。私の住居はサンフランシスコ市のすぐ南に接したデーリー市にあり、ここはサンフランシスコ市以上に霧の多い土地で西側は大平洋に面しており、大平洋から吹き上げる風を利用したハングライダーが、夕日を背にして飛んでいる姿は幻想的でさえあります。

当大学の泌尿器科教室はエジプト出身の有名なタナゴ教授が主任で、多くの助教授、講師とレジデント、インターンが働いていますが、この研究室には一年前からドイツ人、エジプト人医師が研究に来ており、私がいった時は中国人、インド人医師も加わり、研究助手はベトナム女性という布陣で真に国際的な研究室でした。したがってここで話される英語も色々で、これを理解するのは今でも容易でありません。この中でアメリカ人講師の英語が最も分りづらいというのは皮肉というか、当然というか、全く不思議な現象です。いずれにしても当大学の人の交流の自由なこと、頻繁なことにはただ驚くばかりです。

研究室のスケジュールは毎週月曜日に実験の進行状態、得られたデータに対する評価、今後の研究方針について2～3時間に亙って自由討論を行い、この結果をふまえて残りの日を実験にあてるということで、普段は午前10時頃から始まり、午後5時には殆んど終りという日本からは考えられない楽な生活です。ただこの他に大学では非常に多彩な講演が毎日の如く行なわれており、当大学のスタッフは勿論のこと、国内、国外の著明な研究者の講演を居ながらにして聞くことが出来るのも著しい特徴であろうと思います。これらは月2回発刊される大学新聞に詳しく予告されており、これを聞くだけでも大変勉強になる仕掛けになっています。

さてアメリカはスポーツなしには語れないと言われていますが、その中でもプロフットボールは最も人気が集まるスポーツで、テレビでも連夜の如く放映されていました。そのため見る機会も多かったのですが、そのスピード、重量感、プレイの多彩さ、緻密さ、どれを取ってもすばらしいの一語につきます。特に昨シーズンは当地の「サンフランシスコ49ers」が破竹の勢で勝ち上り、アメリカ1を決めるスーパーボールに進出、優勝を遂げたことが当地の最大の出来事でした。普段は全く静かな周りの家々から、優勝の瞬間歓声が沸き上り、多数の人々が道路に飛び出して「We are No.1!!」と叫びながら肩を抱き合って喜び合ったのは勿論のこと、自動車は旗やのぼりを立て、クラクションを鳴らし続けながら走り回るという有様で、サンフランシスカンがいかにこの瞬間を待ち望んでいたか、痛い程感ずることが出来ました。この騒ぎは翌日選手がサンフランシスコに凱旋した時最高調に達しました。パレードにはこの地始って以来の多数の人が参加し、怪我人も多数出るというおまけまでつきました。新聞はほぼ全面がこの記事でうずまり、テレビニュースもすべてこの話題に占領され、もしこの時に世界に大事件が発生しても片隅に追いやられたのではないかと思います。

僅か9カ月の生活でアメリカを語ることは勿論出来ません。見事に発達したフリーウエイ網、巨大なショッピングセンター、規格外の大きさを誇る「ヨセミテ」、「死の谷」などの国立公園、ディズニーランドを代表とする大遊園地、その一方日常茶飯事の様に発生する暴行、殺人事件、影にかくれたかの様に見える人種差別、難民、

日本との経済摩擦、失業など、どれをとっても話題につきることはありません。いずれにしても始めて日本を離れた、いわばおのぼりさんの頭には、これからもアメリカが未知の国である様な気がしてなりません。

サンフランシスコにて

（泌尿器科学講座　助教授）

昭和57年度入学式

昭和57年度入学式は、4月9日(金)午前10時から、体育館において、挙行された。今年度新しく本学の学生となった120名（内女子学生15名）はさまざまな期待を胸に秘め式に参列し、学長告辞に引き続き新入生を代表して青木裕之君が、入学誓約書を読み上げた。式終了後はガイダンスの為、講義室に向う途中、待ちうけた在学生・父兄に拍手と紙フブキをうけ、式で緊張していた顔にも、やっと笑みがこぼれていた。　（学生課）

昭和57年度入学者名簿

昭和57年度運営組織

（教務委員会委員）

委員長	小野寺壮吉（副学長）	
副委員長	石井　兼央	
委　員	笹森　秀雄	星野　了介
	内田　倖喜	藤沢　仁
	片桐　一	久津見晴彦
	清水　哲也	天羽　一夫
	米増　祐吉	

（厚生補導委員会委員）

委員長	小野寺壮吉（副学長）	
副委員長	原田　一典	
委　員	美甘　和哉	晴山　雅寛
	小野　一幸	黒島　晨汎
	佐藤　利宏	宮岸　勉
	竹光　義治	関口　定美

（学生課）

研究室紹介

■ 眼科学講座 ■　　高橋正孝

眼科学講座は、保坂教授以下10名の医師、技官1名、検査助手1名で構成されています。少ない医局員のなかから2名がアメリカに留学しているので実情は今のところあまり楽なものではありません。しかし、5年、10年先の医局を考えた場合、それは楽しみな布石でありますから、小人数ながら強い連帯意識に支えられ、我が医局は着実に前進しつつあります。

外来診療は月・水・金のみで、70～100名を診察しております。遠方から泊りがけで来られる患者さんが多く、いきおい1日ですべての検査を済ませようとするため、5時過ぎまでかかることもあります。

病棟診療、手術は外来日のあい間に重点的に行います。保坂教授の方針で、入局2年目までは研究よりも診療と治療を覚えることに力点を置いていますので、たとえば他大学では入局3年を過ぎないとやらせてもらえない白内障手術を既に20～30も経験しているのが当科入局2年目の医局員です。

診療設備の充実ぶりは最近とくに顕著で、アルゴンレーザー、硝子体手術器具、眼科超音波診断装置、網膜剝離手術用トランスイルミネーター、アンダーウオータージアテルミー、冷光源双眼倒像鏡、フォトスリットランプなど高価な最新鋭設備を有しております。医局員は片寄ることなくすべての検査・治療を習熟するよう義務づけられているので、入局2年目までに手術場以外での診断・治療はひととおりこなせるようになります。

当科の研究面を紹介しますと、保坂教授の屈折関係と、私の硝子体・網膜関係の研究が主たるもので、いずれも眼科領域では守備範囲が1、2番目に広い分野です。保坂教授は自動屈折検査器の精度に関する研究を昨年の日本眼光学学会に続き、本年10月、サンフランシスコで開かれる国際眼光学学会で発表されます。硝子体・網膜の方では、大学院生の田川・大野両君が種々の条件下での家兎硝子体のヒアルロン酸定量を試みており、増殖性変化を臨床的に阻止する可能性を追求しております。また、吉田・古川両君が世界のトップレベルにあるボストンのRetina Foundation のスタッフとして硝子体・網膜の臨床研究に取り組んでいます。細隙灯顕微鏡による硝子体撮影、レーザードップラーによる糖尿病性網膜症の網膜循環速度測定、Fluorophotometry などすべて患者を相手の研究という恵まれた環境にあります。

眼は観察すること自体が難しく、実習の学生諸君にはとっつきにくい側面があるようです。最低限必要な検査を覚えてもらうだけで1週間の実習は終わり、結局よく見えなかったという強い印象を受けて次の科へ移るのですが、そう簡単に見えないからこそ Specialistたりうるのだと考えて欲しいものです。

この3月末にボストンから村上先生が帰国しましたし、5月からは3名の入局者と1人の研究生を迎えることになっています。数カ月前から若い英国美人を週一回医局に招き、医局員、技師、検査助手、秘書のために、外国人に慣れる集いを開いております。希望者はどうぞ！ただし英会話のまったくダメな方に限ります。

（眼科学講座　助教授）

新入生研修

今年度の新入生研修は4月19日(月)・20日(火)の両日、午後5時から本学の第1・2セミナー室・和室・一般教育会議室で行われた。新入生諸君が1日も早く豊かな学園生活を送れるよう、参加者相互のコミュニケーションを図ることを目的として、教官と共に自己紹介及び懇談会を通じて、親睦を深めていた。

（学生課）

昭和57年度の主な年間行事

今年度の主な年間行事は次のとおりです。なお7月に行われる第29回北海道地区大学体育大会は、本学が当番校となり参加大学は、道内38大学、43単位大学、競技種目は男子13種目、女子8種目です。

本学の体育施設及び、市内の各体育施設で行われますので学生の協力をお願いします。

4月	9日	第10回入学式
	19日～20日	新入生研修
6月	17日～20日	第8回大学祭
7月	16日～19日	第29回北海道地区大学体育大会
9月	8日	体育大会
	22日	解剖慰霊式
10日	28日～11月12日	新入生研修(水・土・日は除く)
2月	2日	第1学年スキー遠足
3月	25日	第5回卒業式

（学生課）

課外活動短信

東日本医科学生総合体育大会（冬季）

総合　男子（準優勝）　女子（優勝）

(男子)		(女子)	
滑降1位	岸（2年）	回転3位	浜口（5年）
回転1位	〃	大回転1位	〃
15km3位	石原（3年）	5km1位	赤平（4年）
8km1位	〃	3km2位	〃
リレー2位	有吉・伊藤・石原・西川		

（学生課）

学　内　規　程

旭川医科大学体育施設使用規程

体育施設の適正な使用を図るため、昭和57年3月12日付けで、体育施設使用規程が制定されました。今後、体育施設の使用は、この規程に基づくことになります。

旭川医科大学屋外運動場体育管理施設合宿研修所使用規程の一部改正する規程

この規程は、名称の簡略化を図るため所要の改正を行ったものであります。

旭川医科大学体育施設使用規程（昭和57年3月12日旭医大達第1号）

（趣　旨）

第1条　この規程は、旭川医科大学（以下「本学」という。）の体育施設の使用について必要な事項を定める。

（定　義）

第2条　この規程において体育施設とは、次の各号に掲げるものをいう。

一．体育館
二．弓道場
三．陸上競技場（サッカー・ラグビー場を含む。）
四．野球場
五．テニスコート

（用　途）

第3条　体育施設は、次の各号に掲げる用途に使用する。

一．体育授業
二．学生の課外体育活動
三．職員の体育活動
四．本学の行事
五．その他学長が特に必要と認めたもの。

（使用資格）

第4条　体育施設を使用できる者は、本学の学生、職員その他学長が特に許可した者とする。

（使用できる日及び時間）

第5条　体育施設を使用できる日及び時間は、次の各号に定めるとおりとする。ただし、学長が特に必要と認めた場合は、この限りでない。

一．使用できる日は、月曜日から土曜日までとする。ただし、祝祭日等の休日（12月29日から翌年1月3日までの期間を含む。）を除く。
二．使用できる時間は、午前8時30分から午後7時までとする。
三．前号の規定にかかわらず、体育団体がクラブ活動として体育施設を使用するときは、午後5時（土曜日にあっては午後1時）から午後7時までとする。

（使用手続）

第6条　体育施設を使用しようとする者は、原則として、使用しようとする日の3日前までに、別に定める使用願を学生課に提出し、学長の許可を受けなければならない。ただし、昼休み時間の使用に係る手続きは、弓道場を除き不要とする。

前項本文の規定にかかわらず、体育団体がクラブ活動として体育施設を使用しようとする場合は、学期の始まる前にあらかじめ、その期間の体育施設使用計画書を学生課に提出し、学長の許可を受けなければならない。

（遵守事項）

第7条　体育施設を使用する者（以下「使用者」という。）は、次の各号に掲げる事項を遵守しなければならない。

一．火災予防に留意すること。
二．設備、備品等を破損又は滅失しないこと。
三．使用許可時間を守ること。
四．許可された目的以外の使用及び転貸はしないこと。
五．体育活動を行う場合は、各施設に適した運動靴を履くこと。
六．喫煙は、所定の場所で行うこと。
七．使用中止のときは、速やかに届け出ること。
八．車両の乗り入れ等、施設を損傷する行為はしないこと。
九．使用前後は、常に施設の整備を行うこと。
十．同一施設を共同で使用する場合は、体育活動による相互の危険防止に努めること。
十一．その他管理者の指示に従うこと。

（体育用具の貸出し）

第8条　体育施設において使用するための体育用具の貸出しを希望する者は、別に定めるところにより、必要な手続きをとらなければならない。

（許可の取消し）

第9条　体育施設の使用を許可した後、本学の行事等のため体育施設を使用する必要が生じた場合は、学長は、すでに与えた使用許可を取り消すことができる。

（罰　則）

第10条　第7条の規定に違反した場合は、使用許可を取り消し、又は以後の使用を許可しないことがある。

（損害賠償）

第11条　使用者が、施設等を損傷又は滅失した場合は、その損害を賠償しなければならない。ただし、事情によっては、その額を減免することがある。

（雑　則）

第12条　この規程に定めるもののほか、体育施設の管理運営に関し必要な事項は、学長が別に定める。

附　則

一．この規程は、昭和57年4月1日から施行する。
二．次に掲げる規程は、廃止する。
　一．旭川医科大学体育館使用規程
　　（昭和50年旭医大達第15号）
　二．旭川医科大学屋外体育施設使用規程
　　（昭和51年旭医大達第22号）

旭川医科大学屋外運動場体育管理施設合宿研修所使用規程の一部を改正する規程（昭和57年3月12日旭医大達第2号）

旭川医科大学屋外運動場体育管理施設合宿研修所使用規程（昭和53年旭医大達第3号）の一部を次のように改正する。

題名を次のように改める。

旭川医科大学体育管理施設合宿研修所使用規程

第1条中「旭川医科大学屋外運動場体育管理施設」を「旭川医科大学体育管理施設」に改める。

附　則

この規程は、昭和57年4月1日から施行する。

第４回卒業式

３月２５日(木)午前１０時３０分から、本学体育館において、第４回卒業証書授与式が挙行されました。父兄、教職員の祝福の中で、卒業生９８名（内女子学生４名）は、感慨無量の面持ちで、１人１人学長から卒業証書を手渡されました。式終了後は、本学食堂で祝賀会が和やかな雰囲気のうちに行われ卒業生にとって大学生活最後の１日が終りました。　　（学生課）

窓外

天羽一夫

"石も磨けば"

崑崙の玉と呼ばれる翡翠は中国では古くから珍重され、台北の故宮博物館ではその集成をみることができる。翡翠は中国では産出されず、多くはビルマのチンドウィン川上流で産出したものが雲南省を経て輸入されたとともに、現在のウィグル自治区のホータンからシルクロードを通って移入されたものと思われる。中国人の玉に対する執着は西洋人の宝石嗜好に似ているが、本邦では石への興味は現在はともあれ古代はもう少し違った形が持たれていたようだ。室町時代の茶事の流行にともない盆石を愛玩することも盛んになり、鑑賞者の増加につれて流派が分立した。その特徴は自然石を配し、石自体の珍奇を賞したもので、盆の中に自然の風景を愛でるという箱庭的なものであり、一部は現在にも何等かの形で引き継がれている。

先日の新聞で小宅の近くの先住民族の遺跡で多数の黒曜石の石斧、石鏃などが発掘されたことを読んだ。石器時代の先住民はこれで木を削って住居を作り、獣を追い、鮭を捕へていたに違いない。この黒曜石は北海道では十勝石と呼ばれるもので十勝岳にしか産生せず、本道での黒曜石の分布は天塩、網走から遠く道南の地にまでみられ、先住民の交易が広く行われたことが知られる。この黒曜石は石英安山岩で叩くと容易に貝殻状新面が出来て鋭利な刃が作れるので珍重されたものであろう。

石は日本でも地方によって特色があり、北海道の神居古潭石、讃岐にはサヌカイト・サヌカイトと呼ばれる玻璃質古銅輝石安山岩は俗にかんかん石と呼ばれて白峯山に産し、叩くとカンカンと快い金属音を発するのが名前の由来で、屋島の頂上や金刀比羅宮の土産店で安価に入手できる。阿波は結晶片岩系の層をはじめとして古世代層から近世代層までの12層が走り、剣山山系や阿南市のリアス式海岸を形成し、梅林石、阿波五色石、碧代石、阿波赤玉石、眉山翡翠、虎石、阿波青石などの名石といわれるものが産出する。昭和37年頃、私が四国鉄道病院に暫次勤務していた頃に名石ブームが到来して、老いも若きも名石探しに夢中になった時代があった。病院でも御多分に漏れずファイトのある若い技師さん達は日曜になると山川を走り回ってこれぞと云う石を拾ってくる。休憩室は忽ち奇岩怪石で埋まり、午後暇になるとグラインダーが唸りだす。鑑賞に堪える石を作るのは大仕事で、拾ってきた石は表面が風化しているので地肌は判らない。そこでグラインダーで風化部分を削り落すわけたが、この段階で大部分は花壇の縁石となって了う。休憩室はまるで石屋の仕事場で騒音と埃りで方々からお叱りを受けたが、さまになるものを持参して口封じをして了う。荒削りしてものになりそうなものは、さらに整形し、針を束ねた竹晶針千本と云うものを使って磨き上げ、前後には水ペーパーで仕上げをして、石の芯ともいうべきものを鑑賞石にしようというものである。書けば簡単であるが、何しろ相手が石塊のことでもあるので、良いものを一つ仕上げるのに１カ月はかかっていた。私も一つと思い勝浦川上流で小さい梅林石を拾ってきた。阿波梅林石は黒色のアラゴナイトに紅白の石灰岩が散在し、梅林の景色を思わせるもので、梅の幹と花との取り合わせが良く、そこに鶯の居るような状景ならいうことなしに名石の名をほしいままにすることができるというものである。早速仕上に取りかかったが、グラインダーもそう簡単に素人の手に負えるものではない。手に擦り傷をこしらえながら、漸く白い斑点が見え出したところで give up、いまだに書斉の片隅で芯の出る日を待っている。もう一つは虎石でこれは真光町の畑の真中に巨大な露出岩があって、これを適当に欠いてくるのだが、軟かいので細工し易い。これだけはまあまあの出来で今も文鎮代りになっている。

私は石は医師に通じまた意志にも通ずると思っている。玉、宝石、貴石、名石も本をただせば、そこらあたりに転がっている石と全く変らない。石の本質を見抜き、形を整へ、磨き上げてはじめて鑑賞に堪へるのは、恰度医学部に新入生が入ってきて磨かれ、その芯が出てきてはじめて医師として独立するのと同じように思う。教育は風化され、苔によごされた表面を除いて内部の輝いた素質を引き出し磨き上げることであろう。しかし教官も機械ではなく人間であって、表面を削り落とせない場合も多い。新しく医学部に入った諸君は自分でも殻を破って自らの芯を出して欲しいと願って止まない。

（放射線医学講座教授）